

昭和二十四年七月二十五日発行（毎月一回、十五日発行）

（通第一九六号）

# 慈光

第十七卷 第九号

## 目

歎異抄第十二章講話(二) ..... 近角常観 ..... (1)

ル―テルと親鸞 ..... 福島政雄 ..... (6)

ふるさとに思う ..... 経谷芳隆 ..... (12)

愚禿のころ ..... 花田正夫 ..... (15)

堂の鈴 (十八) ..... 佐藤強三郎 ..... (21)

## 次

## 歎異抄第十二章講話(二)

大切の証文につきて

近角常観

歎異抄の中には時々証文ということを経返してある。現に此の十二章には二度までも出てある、即ち「あやまて學問して、名聞利養のおもいに住するひと、順次の往生いかがあらんずらん」という証文もそうろうぞかし」といい、「靜論のところにはもろもろの煩惱おこる、智者遠離すべきよしの証文そうろうにこそ」とある。十七章に至りては「辺地の往生をとぐるひと、ついには地獄におつべし」ということ、この条いずれの証文にみえそうろうぞや、学生たつるひとのなかに、言いださるることにてそうろうなるべし、あさましくそうろう、經論聖教をばいかようにみなされてそうろうやらん云云」とありて、いかにも何時でも証文ということに常に力を入れてある。而して最も問題となるべきは結文の中に

「大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、めやすにしてこの書にそえまいらせそうろうなり」とある文字である。この十二章十七章の語氣より察して見

ればこの大切の証文とあるは如何にも大切の証文に違いない。そして其の大切の証文をぬき出してこの書に添えて置くところがあるが、其の証文は何であろうかと云う問題である。かねてよりこの問題につきて歎異抄を拜読する度毎に心にかかつておつたが、遂に確信する考えが出来たから一刻も早く発表して同朋の方々に御知らせしようと思うのである。

実は結文を述ぶる時に申してよきなれど、それではあまり遅くて間に合わぬ憾がある、何となれば是は歎異抄全体に渡る大問題にして、この問題を解決して置かなければ、歎異抄全体の組み立てが分らぬことになる、それ故今十二章に証文ということが随分や、かましく、繰返してあるから、それを機会にしてこの問題を解決して置こうと思つのである。それにつきて古人の説を挙げて見るに、未だ一一調べたのではないから分らないけれども、香月院師と了詳師との両説を以て代表と見做すことが出来るであらう。

香月院師の考は単純で、大切の証文をぬき出して歎異抄の附録にしてあったものなるべけれど、惜哉現今失せて仕舞うたものゆえ分からぬといふのである。了詳師は大いに考えられたのである、即ち世上伝ふる所の親鸞聖人血脉文集という書がある、それが歎異抄の附録にしてあった証文であろうといふのである、何故なればその書の第五の文章が法然上人親鸞聖人御流罪のことを書きてある、如何にもその文章がこの歎異抄の終りに附け加えてある法然上人他力本願念仏宗を興行す云云の文とはなはだ似てある、そこでこの血脉文集全体が歎異抄の附録であったのであらう、その他の御消息は皆なくなつてその御流罪の文章だけが今に附録となつて残つたのであらうといふ考である、一往もつともな説で、何人でも血脉文集を繕くなり、この第五の文には如何にも歎異抄附加の文と似てあることを感ずるのであらう、然れどもこの血脉文集は宝曆年中越後の順崇師即ち香樹院師の実父の出版されたものにして、そのはしがきにも書いてあるが末燈抄及御消息集と同じく、聖人の御消息を集めたものである。そしてその文章の意味をたどるに歎異抄の証文として書き集めたというには頗る適切ならざるものがある。そして第五の文と歎異抄とは如何にも同趣意のものなれど血脉文集の方はたしかに聖人の自記の文章である。歎異抄はたしかに歎異抄著者の筆に成つてあ

る、或は聖人の自記の文章を、抛として書きたものとは考えられるも、血脉文集の文そのままが前後は失せて其の文だけ残つたというには少し信じ難い。のみならず全体歎異抄の著者という人は文章の筆致といい、組立といい、頗る適切剴切なる扱いをする人である。漫然と御消息を集めて大切の証文ども少々ぬきいでまいらせそうろうて目やすにして此書にそえまいらせそうろうなりなど言ふ筈はない。

そこで私は久しき前から他の方面より歎異抄の組立てにつきて気付きつたことがあつたことがある。それは既に第十一章にかかったときにその事を明言して置いた。即ち前九章と十一章已下とが妙に相照応することである。而して第十一章と第十三章と照応し、第二章と第十二章と照応し、第三章と第十三章と如何にもよく照応するのに不思議に感じて、その後の章も一々これを試んと企てたも、第四章慈悲に聖道浄土のかわりめありというに對して、第十四章一念に八十億劫の重罪を滅すと信ずべしといふことと言ふは、少し不適切の感を免れぬ。固より信仰上のことなれば、強て引き合せば連絡のつくことは必定なるべけれど、牽強附會に陥るの虞ありし故にその事を明言しておいた筈である。されど又第十二章にかかるとき又第二章と照応して如何にも両々相符合する妙趣に感歎極りなき次第であつた。第二

章の眼目たる「自余の行をばげみて仏になるべかりける身が念仏をもうして地獄におちてをうらわばこそすかさされたまつりてという後悔もそうらわめ、いずれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし」に対して第十二章に「自余の教法はすぐれたりともみずからのためには器量及びがたし云々」の筆意如何にしても唯事ならず思うて居ったのである。

しかるに先日美濃高須の教学会に出席して歎異抄を講じ、その最終日の前夜、この大切の証文につきて考えて居る間に、「目やすにして此書にそえまいらせそうろう」とある目やすという文学に大に着眼したのである。そこでこの大切の証文とは前九章の祖訓を自身のことである。それを第十一章以後に一々挙ぐる異議を正さるる歎異抄の正目的に対する目やすとして、初めに添えられたのであるということに忽焉として感得發明する所あつた。此に於いてや久しき問解けんとして未だ十分解けざりし問題一時に渙として釈然として永解解得することを得た、殆んど疑を狭むべき余地がない。そこでこの度は方向を異にして第十四章の異議を正さるる目やすとして第四章を顧みたら、頗る適切である。「念仏もうさんごとに罪を滅せんと信せんは既にわれと罪を消して往生せんとはげむにてこそそうろうなれ、若ししからば一生の間おもととおもうことみな生死の

きづなにあらざることなれば乃至ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、病惱苦痛せめて云云」とあるを、第四章の祖訓の目やすに照らすに、「聖道の慈悲はものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり、しかれどもおもうがごとくたすけとぐるることきわめでありがたし、又浄土の慈悲というは念仏していそぎ仏になりて云云」とある。我等は此世で罪は滅せぬ、命終して初めて煩惱惡障を滅して無生忍をさると、其時が仏である、大慈大悲であるということになる。

抑々前九章と第十一章已下とを嚴密に照應せしむるを牽強附会と感じたるは、古来香月院已來伝わりたる初の九章は祖訓なるゆえ経の如し、後の九章は著者の筆なるが故に伝の如しという考が先入となりてある。而して大学の如き伝は経を釈したのであるという思想がある、そこで前後の照應を考えるに前九章の祖訓を本としてこれを解釈する為の後各章と見るゆえに、慈悲に聖道浄土のわかれめありということの解釈としては、一念に八十億劫の重罪を滅す云云は少しく迂遠に見るのである。しかるに歎異抄としては後の各章が主要なる問題である。その問題解決の目やすとして其意を闡明するに適切なる祖訓を抜き出して目やすになし下されたのである。勿論歎異抄として後各章に挙げたる異義を正すためにして、且つその異義たることの明ら

かになる標準たるべき聖人直々の御言が前九章であるとは既に第十一章を講じはじむるときに明言はしたれども、前九章が即ち大切の証文也、後の目やす也とまで判明せざりし為に、知らず識らず前九章を本として後各章との照應を考えたゆえに、其の間に少しく適切ならざるものがあるように思うたのである、しかるに此の如く判明してみれば、第十一章已下各章の異議に対する目やすとして、第一章已下各章が一々適切なるものがある。第十一章に対して第一章、第十二章に対して第二章、第十三章に対して第三章は最明白々、第十四章に対する第四章は今弁せし如し、第十五章は煩惱具足の身をもてすでにさとりをひらくといふこと不可也、決して今生にさとらるるものにあらず、彼岸に往生し、尽十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益するときに悟りである、此身でさとりをひらくというは釈尊のごとく種々応化身を現じ、三十二相八十随形好を具足して説法利益出来るにや。これを第五章に照らすに、親鸞は父母孝養の為に念仏一遍だにもうしたることはい、我力にてはげむ善でなきゆえ今生では父母でも救えぬ、浄土に往生して神通方便を以て一切衆生を済度するといふのである。次に第十六章は信心の行者惡事ある毎に一々廻心せねばならぬというが一向専修の人は廻心ということとは一期に一度であるのみである。かくの如きことを云う

ものは、口には願力をたのみたてまつると雖も、心にはよからんものをこそたすけたまわんと思ふからである、まことの信心だにあらばわるからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心もいでくべし、すべて往生にはかきこきおもいを具せずしてただればれと弥陀の御恩の深重なることつねにおもいまいらすべし、しかれば念仏ももうされそうろう、これ自然なりと、之を第六章に照らすに専修念仏のものがわが弟子ひとの弟子といふことを争い、一旦弟子が師にそむけば廻心せねばならぬ、往生すべからずなどいふはもての外である、親鸞は弟子一人もたす、ひとえに弥陀の御もよおしにあらずかりて念仏もうす人は如来の御弟子である、自然のことわりに相叶わば仏恩をも亦師の恩をもしるべきなりと、前後照應して自然の徳によりて仏恩師恩がほればれと喜ばれると、心地よき程相合すること掌を合せたるが如し。第十七章の如きは一寸見れば別の様なれども信心。かけたる行者ゆえ化土へ入るのである、信心の行者少きからである、されど疑の罪を償いて報土に入るのである、「それ故第七章には念仏者は無得の一道である、何故なれば信心の行者は一切無碍であるからである、この無碍の光に遇わぬのが化土であるといふのである。第十八章に施入物の多少により大小仏になるべしといふは不可である、これを第八

章に照らすに念仏は行者の為に非行非善である、何ぞ多少大小を論ずべき。

かく第十一章より十八章に至るまでの歎異に対して一章より八章までの証文を目やすにしてあるのである、そして第九章は外に對すべき所なきが如く見ゆるが、是亦強いて仔細を考うれば、意味は連続して恰も結文に照応する如くである。結文は異解を挙げ是皆信心の異なるにより事起りたるのなりとて、信行證論の御物語を挙げ、源空が信心も如来よりたまりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なりとあるに對して、暗に第九章の親鸞もこの不審ありつるに唯田房おなじころにてありと何れも同一信心の趣を挙げたものである。是で十分なれど意味の一致を言えば結文の「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」とて善導の機の深信と同じといえるは、恰も第九章の不喜入定聚之數一不<sub>レ</sub>快<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>直証之証の御悲歎即、踊躍歡喜の心少きこと、又いそぎ浄土にまいりたき心なきを懺悔し、これにつけてこそいよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候えと符合するが如し。併し是は自然の一致である。已上煩わしきを厭わず、大体に於いて第十一章已後に對する前九

## ルーテルと親鸞

### 一、肖像

ドイツのマルチン・ルーテルと日本の親鸞聖人、此の二人は大変にちがったところがあり、また非常に似通ったところがある。

先ず肖像を比べて見る。ルーテルの肖像は幾つかあるが、其の中で、一五四八年にルガス・クラナハが彫刻として遺したのを見る。ルーテルは一五四六年に世を去っている、この彫刻像は死後二年程の時作られたものである。私もその原作の彫刻像を見たのではない。それを絵にしてルーテル選集の最初に出してあるのを見たばかりである。

ルーテルは野人であるという感じが先ず起る。所謂文化人ではない野人である。そしてその眼は大きく開いている世界を見わたす眼である。

体格はしっかりとしている。併し顔と全体から受ける感じでは、この人は決して戦う人ではない。深いゲミユートの人であるという感じである。この人なら神の讚美の歌を

章が目やすの証文たることを弁じたるのである。

かく着眼すれば歎異抄のはしがきは異を歎く前に目やすたるべき故親鸞聖人御物語の趣耳の底に止る所、聊か之を記すという書き出しである。第十章はその祖訓を結びて正しくその無義を義とする正義に對する異義の条々を挙ぐるという書き出しである。そこで結文には、いづれもいづれも繰言に候えどもかきつけそうらうなり、生存中は同心行者の不審のある人には話をするが、閉眼の後は唯信抄等の聖人の御用いの聖教を読め、そして大切の証文を書きつけてこの異義に對する目やすにしてこの書に添えたという書方なり、いかにもいかにも庖丁の牛を解くが如く、是で歎異抄の大体、刀を迎えて裂くるの感がある、さて私がこの考を高須に於いて感得したる後習日之を弁じたる所、不思議なる哉同説を知れる人々がある。不審の余りこれを尋ねたるに同地の服部竜峯氏の家に高閣に束ねられてあった。古く伝える歎異抄悲母報恩記という至極不完全なる断翰零墨ともいふべき筆記本がある。何人の弁じたるものとも分からぬ、其の中に恰も同様の意味が説きであつた。そこで、私に以為、古人が或は私にこの説を告げ知らして下されたのではなかつたかと感ずる次第である。事全く暗合であるが、一は私の考に對して古人の同意を得たるの感あり。又無名の古人の説を没せざるために事実を披瀝したる次第である。

## 福島政雄

作ることが出来るという感じである。もつともルーテルの大論文の中では随分厳しく法王を批判しているところもあるが、これは信仰の正義を天下に明にしたのであつて、ローマ法王と戦うということが主意ではない。この肖像のルーテルは世界を見わたして、真実の信仰の道を深く考へている。その顔には一種の淋しささえ漂っているように見える。元来は平和の人であつて戦いの人ではない。

転じて親鸞聖人の肖像を見る。それは鏡の御影と言われているものであつて、聖人の弟子によって描かれた最も信頼すべき肖像であるという。先ずその顔全体の感じであるが、頬骨が張つて口がしまつて意志の人という感じがする。決して大宮人というような風ではなく、一種の野人のような風格がある。意志が強い、また鋭さがあるという点で日蓮上人に劣らぬ生命の感じである。ただその眼を見ると、これはルーテルのような開いた眼ではなく、象の眼とも言いたいような慈愛の眼である。慈眼視衆生という觀

音程の句を想い出す。その体格全体の感じはどっしりとした力強い感じであって、これならば熊谷蓮生房と相撲をとっても熊谷の方が負けるかも知れないと思われる。相撲は別として、信仰の上には聖人と蓮生とは響きあうものがあった。体力も絶倫であった。二人が全煩惱の全放下ぜんぼうげ。全融化という念仏の境地で照らしあった風光が想像せられる。

この親鸞とルーテル、若し対面したならば如何であろうか。ルーテルはその見開いた眼をもって洞察した世界の信仰状態を語るであろう。聖人はその鋭い心眼を以て徹見した煩惱の中に一切衆生の姿を見ることを物語るであろう。

ルーテルがローマ法王に対する憤激を物語るならば、親鸞は承元の法難において、主上も臣下も共に法にそむき、義にたごうたことを悲しみ物語るであろう。而して何処かで共鳴があるであろう。

二人とも野人であるという点では共通である。野性があるところに純一な信仰がある。ルーテルは庶民の家に生れ、親鸞は貴族の家に生れたとなつてはいるが、信仰の人としては二人とも野趣があつて、その風貌ふうぼうに少しも文化人というところが無いところに、無限の味わいがある。しかもルーテルは聖書翻譯の第一人者であり、親鸞は一切経を讀み通して、その所要を抄出した人である。

宗教人の宗教臭きは眞の宗教にあらずと言いたい。野趣

与える大論文においては烈しく法王を攻撃している。正に信仰のための堂々たる戦である。これに比べれば、親鸞においては叡山に対して戦う気分などは全く無い。親鸞の全集を讀んでも戦うような言葉は全く無いと言つてよい。教行信証の後序の中に「主上臣下、法に背き、義に違し、忿を成じ、怨を結ぶ」という烈しい言葉があるが、これも戦う言葉ではない。むしろ悲痛な歎きの言である。越後に流罪の身となつた時でも、決して激せず、辺鄙へんびの人々に仏法を伝える縁が開けたことを感謝している。

ルーテルがアウガスチン派の修道院に入った動機は何であるか、色々な説が伝えられているが、落雷に逢うて「聖アンナよ、助けたまえ、私は僧になりましょう」と誓つたということが本当であるかも知れない。何か異常の感動事件があつたことと思われる。親鸞は事情が全くちがう。四才にして父に永別し、八才にして母を亡くした結果の無常感が、叡山に入つて出家する動機であつたようである。ルーテルは自然現象の痛撃が動機となり、親鸞は人生の無常ということが動機となつていてと考へれば、ここに面白い対比がある。ルーテルはエルフルトの修道院にあること僅か三年ばかりであつたようであるが、親鸞は叡山の修行二十年であつた。

ルーテルの修行は、服従、断食、祈祷、不眠などで、そ

満々の風格を以て、一はワルトブルグ城の隠遁時代には剣を帯び、一は越後への遠流時代には愚禿の姿であつた。宗教に入つて、宗教を出で、信を味つて信心顔をしない、この二人の肖像、これは宗教について大切なことを示しているのではないかと思う。 昭和卅二、十一、八

## 二、生涯の輪郭

ルーテルと親鸞との生涯を比較すれば、全く正反対であるという人がある。なるほど先ずその生れを対比すれば、ルーテルは庶民の家に生れ、親鸞は貴族の支流の家に生れている。併し前回に述べたような容貌の対比ということになれば、両者ともに野人の相であつて、親鸞も貴族らしいところはない。

生涯の活動を見れば、ルーテルは庶民をも王侯をも相手にしているのに対して、親鸞は全く庶民ばかりを相手にしている。ルーテルの生前における存在ははっきりし過ぎるほどはっきりしているが、親鸞はあるか無きかと思われるような存在である。この点両者は正反対である。

ルーテルは一五一七年に九十五箇条を張り出した時まで、ローマ法王に対して戦うというほどの意向は無かつたと思われるが、併し既に一五一年にローマを訪問して後のルーテルは次第に法王に対して幻滅の気分を深くしていたようである。一五二〇年に公にしたドイツ国民の貴族に

の間に靈的苦悩の深刻なものがあつたようである。その解決はパウロによつて得られ「義人は信仰によつて生くべし」という言葉が心にひびいたのである。親鸞の苦悩は愛欲がその中心ではなかつたかと思われる。然しその解決は法然によつて得られた。「この世の過ぎんよりは、念仏の申されんようにして過ぐべし。聖にて申されずば妻をもうけて申すべし」という法然の言葉は、温かに親鸞の心に響いたと思われる。同時に「地獄は一定すみ家ぞかし」という自覚が深く起つて来たのである。

ルーテルはウイツテンベルグを根拠地として法王に対する信仰的宣戦の布告を行つてゐる。その後のルーテルは無信仰に対する正しき信仰宣戦であつた。それは聖戦といわべきものであつたかも知れない。ルーテルは戦を好む人ではなかつたであろう。オルムスにおけるルーテルの如きは正に壮絶ともいふべきすがたをあらわしている。親鸞は全く違ふ。叡山の僧徒から迫害されて、師法然は四国へ、親鸞自身は越後へ遠流の身となつても、決して戦うという態度はなかつた。むしろ信仰的自覚が内面的に深くなつて、愚禿親鸞と称するようになった。そしていよゆる辺鄙の群類をいつのまにか教化している。それも教化するという態度ではなかつたようである。仏の慈悲を感謝する深い心持がいつのまにか他の人々に染み込んで行つたのである。

ルーテルはワルトブルグの城中にかくまわれて、聖書翻譯の機会を得た。これはルーテルとしては神往快心の仕事であったろう。親鸞は越後、常陸の時代はいわゆる和光同塵の時代であった、その教化は極めて地味であり、たとえは辻堂に数人が時々集って心持を語り合うというようなこととの間に、信心が静かに胸から胸に伝わるというような生活であった。京都時代の晩年が述作時代であって、八万四千の経巻から心にひびく言葉を抜き出して、教行信証という根本の著述を成すということから色々の述作が八十八歳までも続けられている。

ルーテルの宗教改革は政治と結びつくようになった。これはルーテルの本意ではなかったであろうが、政治と結びついて宗教戦争のいとぐちとなった。親鸞の教は徹頭徹尾政治との結びつきは少しもなかった。そこに純粹性があると思う。後世の本願寺などは政治的権力者と結託したり、本願寺そのものに宗教的組織の政治を行ったりして墮落しているが、親鸞においてはすこしもそんな事が無かった。ルーテルは世間的に大に発展したという趣がある。親鸞は全く縁の下の力もちであった。どちらが本当にこの人の世を潤して来ているか、それは見る人の心にまかせるより外はないと思う。

昭和廿三、一、十九

### 三、廻心

うということに落着いたのである。

義は神の恩寵としてわれらに与えられるのであるということに心の眼が覚めたところにルーテルの廻心がある。修道院の生活様式などは問題にならない。この心靈的事実が第一義のことである。惟うにルーテルがこのことに目ざめた時は歎喜の情にひたされたに相違ない。廻心のよろこびに深いものであったと思う。はるかにパウロの心境に触れたのである。

これに対して親鸞の廻心は如何であったか。叡山における二十年間の修行は、何等親鸞の心を開かなかった。元来父母を亡くした無常観が出家の動機であったかと思われ、叡山における所謂念仏三昧とか、法華経その他の誦誦とかは少しも親鸞の苦悩に解決を与えなかった。心月を観ずといえども妄雲なお覆い、定水を凝らすといえども識浪なお動くという言葉は親鸞の言葉でないかも知れないが、その心境はこの通りであったらうと思われる。殊に青年期以後の苦悩は深刻であったと思われるのである。

この親鸞の廻心はルーテルとちがって、聖典の研究によってもたらされたのではない。生きた人間の直接の啓発によったのであり、その啓発をした人は法然である。しかも法然に最初に逢った時に直に心が開けたのではない。二十九才の春から夏にかけて百日のあいだ、雨の降る日も夏の

廻心というのは仏教の言葉である。英語でコンバアージョンといい、ドイツ語でベケールングというのと同じ意味の言葉であろう。宗教的な心の転換である。

ルーテルのベケールングはどの様な有様であったか。友人が雷に打たれて目の前で死んだのが転換の動機になったという伝説があるが、これは伝説であって事実ではないらしい。然し大雷雨にあったということは事実であると伝記者はいう。二十二才の夏七月二日、父母を訪ねて帰る途中エルフルトに近いシトウテルハイムの村にかかった時、大雷雨に遭遇して、おそろしさのあまり「聖アンナよ、お助け下さい、私は僧になりましょう」と言ったということが伝えられている。その後十四日にして突然修道院に入ったという。この転換はまだ宗教的廻心というべきものではなかったであろう。

苦悶が続いていた。エルフルトの学生時代からの苦悶である。その苦悶は修道院に入ったからといって直に解決したのではない。断食とか労働とか絶対服従とかいう修道院の生活そのものは決してこの苦悶を解決するたよりにはならなかったらうと思う。その解決の道を開いたものはシュタウビツツ氏の激励であり、ローマ書の研究であり、しかもその中心問題は「義人は信仰によって生く」という義のありかたであった。義は神にあり、神は我等を義としたま

暑い日にも欠かさず法然の許に通って、直接の教を受け、その後はじめて廻心ということになったのである。その廻心には非常な歎喜と感恩の情とが伴ったのである。その廻心は「念仏ただ一つ」という境地への廻心であるが、その念仏は叡山の念仏三昧の念仏でない。仏陀より廻向された念仏である。仏陀からの賜である。これはルーテルにおける義人の義は神の賜物であるというのに似ている。併し親鸞の念仏は、親としての仏陀の呼びかけの声と子として親鸞がこれに答える声とのひびきあう声である。義というよきな心持とちがって、視と子とのいのちが融けあうひびきである。キリスト教の祈りの純化された極致は親鸞の念仏に似たことになるかも知れない。

ルーテルのベケールングにはローマ書の研究ということが前提条件として大切なことであると思われるが、親鸞の廻心にはさような研究ということが必要条件としない。法然のいはゆる捨・閉・擲・抛であって、修行のための經典などは捨てよ、閉じよ、擲け、抛てというのである。而して直に仏陀の智慧と慈悲とに触れよというのである。

ルーテルはベケールングの上では「神の義」という言葉がなつかしい言葉になったと言っている。この義というのは正しさということである。正しさを神から与えられるのである。神の恩寵として正しさを人類に与えられるとい

うことに目ざめることが、ルーテルにおける廻心である。自分としては少しも正しいことがなく、罪惡に充滿しているその自分に神の恩寵として義を授けたまうということ。我身の上に感ずる転機がベケールングである。そこにキリスト教の特長があると思う。

親鸞の廻心の味わいはすこしちがうようである。全生命を仏陀の懐に投げ入れて、仏陀が何を与えようが、それは問題にしないという心境である。もっとも「わろからんにつけてもいよ／＼願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし」といわれてあるからここには道徳との交渉はあるが、信心の人は正しい人になるというのではない。廻心は一生涯に一度の廻心であるが、それが一生に徹して、ただ願力を仰ぐ念仏の生活が続くというのである。その念仏の内容を義とはいわれない。「念仏には無義をもて義とす」と言っている。この「無義の義」と「義人は信仰によりて生く」という義とはちがう。そしてまた、無義をもて義とするというのは、正しいとか不正とかいう計らいを超越するというのであるから、義人の義という味わいよりも更に無理のない境地であるように思われる。「自然のことわり」という言葉には深い味わいがある。そこで廻心以後のルーテルと親鸞との人生に対する対度がちがうところが出てくる。ルーテルは神から賜った義を根本として正しい信仰のために戦うという態度になつて

## ふるさとに思う

私は六月の末久しぶりにふるさとに皈つた。私の郷里は播州平野を流れている千種川の上流で徳久という村落である。三箇村を合併して町制は布いているが村のほとんどは農家である。丁度田植の真最中であつた。昔は牛が右往左往していそがしい中にもどかな風景であつたが、今はバタン／＼音をたてる耕うん機が牛の代りをしていて昔のようなどかさは見られず、私は時の流れというものをつく／＼思つた。でも庫裡の土間には昔と変らず燕が巢をして、四五羽の子燕がチイチイ啼いているのがなつかしかつた。

燕子のむかえてくれし飯郷かな  
こんな句ができた。そして私は幼くして死別した両親を思い、わが人生をふりかえるのであつた。

私は四才で母に死別し、十一才で父に死別するという逆境から人生をスタートしたのであるが、母の思い出になるものは一つもないが、父の面影は、いつも私の脳裡をかすめるのである。父に別れた時、私には十五と十九の二人の

法王に対して戦うということにもなる。もっともそれは和を根本とする戦であつて、所謂世間の戦ではない。世間の戦についてはルーテルはあくまでも平和論者である。

親鸞においてはルーテルのような信仰の戦という心持はない。廻心以後の親鸞の生活は随順と讃仰との生活である。叡山の僧徒からひどい目にあわされても、正しい信仰のために戦うということはない。自分の信仰ばかりが正しいなどとは思っていない。南都北嶺にはそれ／＼その立場があるということを認めている。しかし自分は、ただ念仏するより外に道のない煩惱具足の身であるという自覚に住している。それで親鸞においてもし戦ということがあるならばそれは自分の内面の戦である。教行信証の信の巻は、この内面の戦を叙しているのでも見ることが出来る。

若し廻心後のルーテルと親鸞とを対面させたならば如何であろうか。両者ともに歡喜の心持があつて静かにほほえみかわすであろう。併しルーテルには乱れた世界の姿を歎じて、正しい信仰、神の義を人々に伝えるという信仰のための戦という心持が腹の底にあるであろう。これに対し親鸞には世間の乱れを自分の乱れとして悲しみ、戦いは自分の心の底に移して、名も無き民と共に、ただ仏徳を仰いで讃歎するという心持ばかりがあるであろう。

両者は共鳴する面においてほほえみかわしながらそれぞれ道の道を歩むであろうと思われる。昭和卅三、一、十九

## 経谷芳隆

兄があつたが、たよりになる肉親は一人もなかつた。壇家の人たちも、これからお寺はどうなるだろう、子供さんたちもどうなることだろう、と心配してくれたものだった。

それから五十年に近い歳月が流れた今、長兄は父の跡をついで任職となつたが、終戦の年の五月、みんなが応召中にさびしく亡くなり、次兄は東京で一家を成しており、私は長年、ご本山にお勤めしているのであるが、綴れば一篇の小説にもなりそうな人生行路であつた。私は今、久しぶりにふるさとに皈つて、いそがしい田園の風景をよそに、めずらしい梅雨晴れの一日をゆっくり家にいて、いろ／＼と思ひ出の糸をたぐるのであつた。

私の思いは、いつもすぐ父の思い出に走る。母を恋う思ひは人一倍あるけれど、顔さえおぼえず思い出がないが、父の顔はおぼえているし、自分が段々父に似てくるので、一層、父をなつかしく思い出すのである。ここで父のことを少し記すことを許していただきたい。

父の名は勝道。安政五年自坊（西蓮寺）の三男に生れ、長じて履信教校から大教校（今の竜谷大学）に学んで坂坊し、長兄の後嗣となつて住職となつた。大正七年六十一才で亡くなるまで、自坊を離れず住職として平凡な一生を終つたのであるが、郷党の学問指導には熱心であつたようである。明治二十二、三年に大教校に学んだ父は、田舎では学者としての評判がひろまつていたようで、自他の門徒をはじめ、組内の僧侶も来られて、四書、五経等から、宗乗、余乗について教わつていたようである。父の死後、ただちにこれらの人々が集つて、謝恩会をつくり、境内に謝恩の碑を建ててくださった。碑の表には「経谷勝道先生之碑」と書し、裏には銘文をしるし、台石には四十七名の門弟名が列記してあるが、この碑が建つた時、私は父が先生といわれるような人だったのかなあ、と子供心に思ったことがある。門弟のほとんどは故人となつてしまつてゐるが、今に存命の人から、

「あなたのお父さんはちょっと偉ぶつたところがなかつたけれど、学者だったなあ、わしらはむずかしい漢文を教へてもらつたが、おかげで人さまに恥をかかずにすむ、まತ್ತくお父さんのおかげじや」

とよきかされる。門弟の中には、校長や村長になつた人実業家として成功してゐる人、また終生百姓をしながら寺思つても胸が張りさけるようである。私はただ一途に、この父の涙にこたえねばならぬと思つて生きてきたようである。世に親の涙ほど尊いものはない。今にして私は逆境の恩寵といふことをつくづくと思ふのである。父のような学も才もない私が、父が学んだ竜谷大学に長年、講師の席をけがしていることも、三十余年ご本山の御真影さまにお給仕させていただいていることも、思えば父の涙に導かれてゐるにほかならないものと感戴されるのである。再来年は父の五十回忌をむかへることである。そして私も六十一の還暦となるが、それは奇しくも父の亡くなつた歳である。父の行年を迎えて、父の五十回忌を修する。その時私は父の涙にこたえられるものがあるだろうか。一隅を照らしどころではない、まだ父の墓さえよう建てずにゐる、おはずかしいことである。しかし

「お父さん、おかげでお父さんの歳まで生きさせて貰いました。ありがとうございます」とは言いたいと思つてゐる。

父の涙を思うにつけても、大悲のおよび声をおもう。池山先生は、および声を「オネガイダカラスグキテオクレヨ（一心正念直来）」とただだかれたと承るが、このみ声こそ、涙を一ぱいためられた大悲の眼ざしを思うのである。

のためにつくしてくれた人等、さまざまであるが、私は大きくなつてから父のこといろ／＼きかされて、

「父はあれでやっぱり、一隅を照らしていたんだなあ」と思うようになった。私は郷里に帰るたびに、父の碑前にたつが、こんどは一日をゆっくりしたので、その銘文を写しとつた。

師諱勝道、資性敦朴不装迎幅、不作詹々之言、掘専念之教宣一貫之道、固草莽之一偉人也矣。（下略）

輪袈裟をかけて、飄々と門徒参りをしてゐた父、母亡き後、三人の私達をかかえて父の苦勞は一通りではなかつたであろうに、いつもニコ／＼してゐた父から偉人と言われよう風ばうはどこにも見つからなかつた。しかし私に最も深い感動をあたへてゐるものは、父の臨終である。

大正七年二月廿八日の夜中、脳溢血の再発で倒れた父はひとことも口がきけず、喉をゴ／＼ならずばかりであつた。私たち三人の兄弟は筆で父の唇をぬらして冷していた。いよ／＼三月二日未明、臨終がせまつた時、父は蒲団から手を出して、私たち三人の手を順番に力一ぱいであらうかたく握りしめて、ジ／＼と見つめるのであつた。その涙を一ぱいためた父の眼ざし！私は到底それを忘れることができないのである。両親亡き後のこの子等はどうかかそう思つたであらう父の千万言を越える涙の眼ざしは、今

ふるさとに皈つて、父を思つて一日を過した私は、京都にもどつて、毎日お勤めしてゐる大谷本廟の祖前にぬかずいた。ここは聖人のふるさとであり、全国の御門徒の心のふるさとである。聖人が六十余歳にして、関東から阪洛されたのは何故であらうか。史家は教行信証の完成のためであらうと推論する。そうでもあらうが、人間として、ふるさとの亡きご両親への思慕の念の止みがたきものがおありではなかつたであらうか。私はそう思つて、祖壇の聖人をなつかしく拜するのである。

祖廟の老杉は、梅雨空にぬれてたくましく生きんとしてゐる。それは晩年の聖人のお心のようにである。老杉のそばには若い杉の子が育つてゐる。聖人のみ教えに生きる人々が続く姿のように思える。ふるさととは遠くそしていつまでも生きつづけるところである。七百年の遠きふるさとである祖廟は、いつまでもお念仏のいのちとともに若く生き続けるにちがいない。

私はわがふるさとに父を思い、ここ大谷の祖廟に聖人を拜して、お念仏に生きる幸せをしみじみとよるこぶのである。

老鶯も雀も来啼く祖廟かな



# 愚 禿 の 心

花 田 正 夫

親鸞聖人八十三歳の御著『愚禿抄』に

賢者の信をききて、愚禿が心をあらわす

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり

と、同抄の上・下二巻のはじめにくりかえしてあります。

「賢者」とは、直接の恩師、法然上人を始めとして源信・善導等々の七祖聖人であります。

「信」とは、「実なり」で、真実で邪偽をはなれたことであります。

「愚禿」とは聖人が三十五歳の御流罪以後、終生御名の上に冠せられたもので、この意味は、愚かで、無戒な、形ばかりの僧である親鸞、ということ、詳しくは後で述べましょう。

「心」とは「神なり、本なり」で、身にもったありのままの心、末代五濁の世に生れた煩惱具足の凡夫、十悪・五逆・破戒の身でありながら無慚愧の愚人の心のまま、ということであります。

聖人が、七祖聖人のお導きをおうけになって、そうした方々の頂かれた信のひかりを鏡として、御自身のありのままの姿をあきらかに照らされて、その有様をおのべ下さったのが次の文であります。

「賢者の信は、内は賢にして、外は愚なり」

七祖聖人の方の弥陀仏のまことを頂いていられる姿というものは、内心に仏のまことの智慧がしみとおっていて、本当に自分は愚者でありましたと外に打ち出していられる、との讃仰であります。

老子も「良賈（よい実業家）は深く蔵して虚しき如し」と述べ、世間の諺にも「みのるほど頭の下る稲穂かな」とありますが、七祖聖人の御述懐をあげましょう。

竜樹菩薩は、菩提の道に行きなやんで、易行道を求める者に「汝は怯弱下劣の者である」ときびしく叱責せられつゝその者の成仏の道を「弥陀仏の本願の船に乗托せよ」と勧められ、御自身も亦怯弱下劣の仲間と同じじられて、ひとすじに弥陀仏に帰していられます。

天親菩薩は、「釈尊の教は沢山あるが、煩惱具足の凡夫は弥陀仏の弘誓に一心に帰命せよ」とねんごろにお勧めになりながら、御自身もまた煩惱具足の身に同じじられて、深く浄土を願われ『浄土論』を作られました。

曇鸞大師は「わが身は智慧浅短にして、十方浄土というような教はとて及びもつかないから、西方弥陀の浄土をひとすじに願うばかりである。丁度それは、愚かな牛を導くには、草を槽に入れて、それに心をかけさせて誘うようにする外はない。もしそのまま放し飼いで牛の気ままにしていては、帰るべき道も失い、身を亡ぼすのがおちである」と表白され、大師自らが愚牛にかえっていられます。

道綽禪師は、曇鸞大師の前述のお言葉をうけられて、たちどころに浄土門に入られました。そして「余は五弱（五つの塵埃で眼をふさがれ視力を失う者）にして牆（かべ）に面するが如し、あに自らよくたやすくせんや」と告白されて「一生造悪の身ながらもよくも弘き誓にあいえたことよ」と生涯本願を随喜されたのであります。

善導大師は「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と深信されて本願に信順していられることは、あまりにも有名であります。

源信僧都は聖道門は理深く道けわしくて「余が如き頑魯の者、あにあえてせんや」と捨てられて唯念仏往生の道を一筋に辿られ、ことに観無量寿徑の、十悪・五逆・破戒の愚人の救済を説かれているところで「このところ、我等が分にあらずや」とそこに御自身を見出されて、念仏往生の教を渴仰されたのであります。

法然上人は、「十悪の法然、愚痴の法然房」とも「白黒もわかぬ盲、是非も知らぬ童」とも常に仰せられ、ことに

観無量寿経の前述の下品の愚悪人の念仏往生するところで「このところもつともかなめなり、すこぶる我等が分に相当せり」と、慶喜していられます。

以上浄土の高僧達は内にみのりのまことが満ちて外にはその気配もあらわされないので、怯弱劣劣、愚牛、煩惱具足の凡夫、五翳面牆、罪惡生死の凡夫、頑魯、十惡愚痴、等々と御自身の愚を外にあらわしていられるのであります。幸にもこうした高僧方の信徳に導かれて、親鸞聖人御自身のありのままの心を次に表白されて、

「愚禿の心は、内は愚にして、外は賢なり」

この「内愚にして、外賢なり」とは、法然上人の選択集にあります。親鸞聖人が深くお心にとどめられて、そこに御自身の姿を見出されているのであります。内心は愚かでありながら、外相には賢者ぶる身、否、内が空虚であるから外相は如何にも賢者振らずには居られない身であるとの告白であります。

善導大師や法然上人は、そのことをきびしく誠めていられるのであります。親鸞聖人はその教誡を蒙られて、いよ／＼仰言る通りで、誠に内外矛盾したあさましい限りのて下さるのであります。そして久遠の弥陀仏の慈光はそこをこそ照らし続けて下さるのであります。

その聖人は、生涯をとおして「愚禿、愚禿」と名告られたのであります。それには色々と深い思召しがありますこととでしよう。或人は、伝教大師が「余は愚中の極愚、狂中の極狂」とありますことによると云われ、或人は、法然上人の「愚痴」、源信僧都の「頑魯」等々によると述べられ、又或人は聖覚法印が「愚禿」と名告つていられたことも参考にされています。

又禿の一字は、涅槃経に禿人、禿居士とあり、僧衣をまいて髪を切りながら法を護らず、唯衣食を得るために寺に寄生することとありますが、聖人はそれに着眼せられたのであろうと言う人々もあります。

以上の方々のとかれることをあながちにどうこうするのではありませんが、私自身としましては、聖人は、観無量寿経の所謂、極惡極愚人の救済をとかれているところに、御自身を見出していられると信じて居ります。

煩惱具足の凡夫が末代惡世に生れて、あらゆる惡縁に催されて惡業の限りを織りなして行く、十惡の者、破戒僧、五逆の者の一つ一つを仏はあげられて、夫々に愚人々と呼んでいられます。そこに聖人は、御自身の愚を見出して

者でありますとの表白であります。

さてこの聖人の御言葉を承ります時、私自身の姿がそこに照らし出されるのであります。狂人は病識を欠きます、狂人と自覚出来ません、自分はあやしいと感じる人は本當の狂人ではありません。私共は底抜けの愚者の故に、常に我賢し、我心得たりとしか振舞えぬ身であります。日常の實生活にそういう振舞から寸分も出られないのであります。

かつて近角常音先生が「君惡人の方から頭を下げて出るということはありえぬことだよ」と、何かの折に仰言ったことが妙に心に刻まれて居りますが、全くその通りであります。

聖人はそれを「汝のこと」と仰言らずに、「愚禿の心」であると打ち明けられるのであります。このお言葉を一度ききますと、そのお言葉が鉄鉦玉のように飛んで来てさけることが出来ません。「聖人様、それは私のことであります」と申さずには居られません。

ここに聖人のお言葉が私の言葉と転ずるのであります。心でどんなに高尚なことを考え、口にどんなに殊勝なことを言ってみても、私の身体そのものが、内愚、外賢の振舞しか出来ないであります。

嗚呼この浅ましい私の身こそ、親鸞聖人がすでに／＼かねてしるしめすところでありました。そこに聖人が同座し

いられ、更に禿居士の姿を、破戒僧で、仏物を偷み、不淨說法し、慚愧の心もない者の上に、見出だされていると思えます。

それは聖人が真面目に自己反省をして見出されたというものでなく、御自身には、われかしこし、われよしの振舞いしか出来ないのに、仏はかねてその全体をしるしめして、それがそのまま真の愚人であり、実の禿人であると照らして下さって、無限の慈悲の涙を注いでいて下さる、その大悲の御まことがしみとおって、「愚禿」の身とおのずとかなすかれたのであります。

近角常音先生が常に御言った一句

「弟を子供の時より育てたけれども、彼に別段不足はなけれども、彼奴が、いつまでも／＼我慢が止まぬのは、あれは困ったものだ、可哀相なものだと、兄さんが愚痴をこぼしていましたよ」との姉（常觀先生夫人）の一言には、初めてお慈悲の片鱗を知らせて頂きましたとの御述懐が思い浮かびます。

御存じの通り、常音先生は、常觀先生と御一緒に求道會館で暮され、常に御講話をお聞きになりまして幾年月がすぎ、しかも信心はえられず、しまいには、

「自分は信心などはとてもえられまい。一生出来をこない

で終るだろう、やむないこと：」

と心を閉じていられた時、このことをお茶のみ話にお聞きになったのであります。その時

「兄は信仰で立派にやっている、自分は信心はない。だから兄の云うなりに従っている。それなのに、我慢がやまぬとは如何にも勝手な云い分である：」

というように、はじめは受取られましたが、やがて

「しかし世の常の兄であれば、それ程我慢がやまぬ弟であれば、出て行け、と云われるはずなのに、それが可哀相なものだ、と、人に愚痴をこぼすとは、何時も心にかけてくれるからである。これは世にも不思議なことである、有難いことである：」

となられますと、

「自分は兄によくしている、さからっていないと思っていることが、我慢、我慢、我慢のかたまりではないか。これを兄は見抜いての可哀相と言ってくれたのか……」

と大いにうなずかれました。

私はこの先生の御告白をおしまして、親鸞聖人が、我々凡夫の常として、穢土をいとうて、浄土を求めようなことは出来ない、その出来るのは聖者である、我々は、仏の示される清浄なるひかりに照らしとおされて、成る程自分は汚濁のかぎりであったと知らされる以外にない、と

仰せられたお味わいの一分を頂くのであります。

我身は愚人である、禿人であると、我身のあさましさを知って、真実なるもの清浄なるものを求めるなどとは不可能なことでありませぬ。若しそう出来たと云う人があれば、それはまだ相対的な信心の域にとどまるものであります。

聖人の仰せられる、愚禿とは、すでに仏が知悉されて、観無量寿経において、煩惱具足の凡夫が、形ばかり髪を切り僧衣をつけて、末代五濁の悪縁に催されてあらわす業さらしの全体を、掌中を見るようにお知らせ下さって、そこに無窮の大悲をそいでくださる、その仏のおまことの光によってお気づきになった御自身の姿であります。

歎異抄に「他力をたのみたてまつる悪人」とありますが、弥陀仏の本願のまことの光をうけて、悪人が悪人と知らされることであると常観先生が指適して下さってあります。

又歎異抄の「本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそれなし、本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」のところ、常観先生は「本願、念仏のひかりに照らされては、今まで金剛石のように立派に思っていた善もガラスの偽玉と知らされ、猛虎のようにおそろしがっていた悪も張子の虎と知らされる」と御講話に述べていられます。このガラスの偽玉、張子の虎、と知らされるところが「愚禿」の味わいでありませぬ。

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり

を、そのままやわらげてお示し下さったものとして、聖人の八十八歳の自然法爾章の結びの和讃が思い出されます

よしあしの文字をも知らぬ人はみな

まことのころなりけるを 一賢者の信、内賢外愚一

善悪の二字しりがおほ

大そらごとのかたちなり

是非しらず、邪正もわかぬこの身にて

まことのころはなけれども

名利に人師をこのむなり 一愚禿の心、内愚外賢一

釈尊の御入滅を前に涅槃経を説かれたように、聖人の涅槃経とも申すべき、自然法爾章の結びが、これで終っておられます。そしてこれは聖人が謙虚な方であったというようなことではなく、仏智不思議のかがやきの前に、これよりほかに云いようのない、それが当然な事実として御述懐されたのであります。

この聖人ましましてこそ、出離の縁のたえて無い身に、尽十方の無碍の慈光がとどけられ、浄土に引接させて頂けるのであります。

以上のことは、仏智不思議のお力によるほかには知れない境界であります。わが力をたのんで、仏智の不思議を疑う者には、相対的善悪に常にしばられてはてしない浮き沈みのさすらいに終ります。夜の間に電灯、油灯、ロソク

の灯、螢火までが光をきそいますが、太陽が東の空にあらわれると、その一切の光は奪われてしまいます。

このことは、大無量寿経の、讃仏偈のはじめに、世自在王仏の御前に出られた法蔵菩薩が、ひかりかがやく仏光の不思議さを讃歎されて、

光顔きざ魏々として威神ききわまりなくまします

かくの如きの焰明は、ともに等しきものなし。

日、月、摩尼珠まにしゆのひかりはこと／＼く奪われて

なおし聚墨じふもく(すみのあつまり)のことし。

とあります。仏徳の大きなみひかりのまえに、日のひかり、月のひかり、摩尼珠のかがやきも、みなことごとく光をうばわれて、真黒なすみのかたまりのようになってしまふ、と、菩薩自らも聚墨の身にかえって居られますところに通じるのであります。

最後に、最初にかかけました聖人のお言葉

賢者の信をききて愚禿の心をあらわす。

# 堂の鈴（十八）

佐藤 強三郎

## 鉄の門

お小夜は丁度その日五智へ花見に行き、偶然にも一郎とお藤が男の子を抱いて散歩するのを見た。

それから見えがくれに境内を歩いて歩いた。赤ん坊は赤い風車がクルクル廻る毎に小さな手を出して取ろうとした。若い綺麗な母が、折角風車を渡してやってもすぐ落してしまった。一郎は嬉しそうにそれを拾い上げて二人を見、手をのべて子供を受取り、高く差し上げ、高い／＼、をしてやれば、さすが男の子だ、お父さんの頭の上で笑って手を振ってよろこんでいる。

青い茂みの中に桜が咲き、人は晴着を着て三々五々嬉々として春を楽しんでいる。殊にお藤は美しく見えた。お小夜は帰りに御神籤を引いたが凶が出た。それでも捨てずに折って帰った。その御神籤の終りの方に……辛抱すれば吉になる、……と書いてあった。

ある日、新聞に一郎の母の死亡広告が出た。一郎とお藤

一郎は「商用で失礼します」といって出かけた。そのあとで静かにお小夜は焼香した。お茶や菓子が出る。お小夜はゆっくり頂き

「以前には誠に申訳が御座いませんでした」とお藤に丁寧な頭を下げた。

……何も知らぬ他人から見れば二人の間は和やかに見えたであろう。然しお小夜の心には八このお藤が私から完全に一郎さんを取り戻して勝鬨を挙げている。くやしい。今に見ろ／＼と、唇を噛んでいたのであった……その後、香典返しに、美しい風呂敷が送られて来た。四十九日の忌明にもまたお小夜はお花を持ってお参りに行った。

……お小夜は一郎に対する恋慕の心をどうしても打消すことが出来ない。消そうとすればする程、燃え盛ってくる。今日は丁度一郎さんに会えたので、お藤の居ない間に、一郎の気を引いてみた。が、一郎はサザエの様に、しっかり蓋をしめて、何としても一郎の胸を開かせる術がない。

一郎とお藤が、再び人も羨む仲にもどり、可愛い男の子まで出来て、この世を晴やかに、楽しく暮しているのを見れば、今の自分の淋しく暗くみじめな生活が悲しくて仕様がな

の名前が並んで出ていた。それを見てお小夜は思わず茶碗を落し、食いつくように見ていた。下唇をかんでするどい眼付をして……。遂にピリ／＼と新聞を裂いて、丸めて投げ捨てた。

お小夜はわざ／＼葬式の日より二日遅れて弔いに行つた。老舗だけあって、まだ弔問の客は後から／＼と訪れていた。お小夜はその人々に混じって、立派に飾りつけてある御仏壇の前で焼香した。一郎もお藤も並んでお客様に会釈をして礼儀をつくしていた。

お小夜は七日目に又お花を持って訪ねた。一郎は店に居たが、一寸困った様な顔をして、お花を受取って御礼を言った。けれど、あがれ、とは言わなかった。それを見てお藤は傍へ来て

「さあ、どうぞ、おさがり下さい」

としきりにお小夜をもてなして、主人の方へ意味ありげに目を向けた。お小夜は招じられるままに座敷へ上った。

とつおいつ考えて夜も眠れず、果ては泣けて／＼仕様がな

ない。一旦はアッサリとあきらめた筈なのに、……立派に別れた仲なのに、……アア、自分は何という未練な女であろう。人の幸福を羨むのはよくないとは思うが、眼の前に、あんな幸福を見せつけられては、忽ちカッとなって、のぼせあがり、前後不覚に腹が立つ。この世はなんて不公平なのである。自分ばかりが、明けても暮れても不連続さばかり、楽しいことは一つもない。こんな娑婆がいやになったどうすれば良いか、もう何も考えたくない。お藤が恨めしい。一郎さんが頑固すぎる。

ああ、居ても立っても居られない。身のやり場がない。起きたり、寝たり、毎日、すこしも落付かない。ある夜、お小夜は、遂に

「そうだ。ままよ……そうする外はない」と歯をくいしばって心に確きめた。

……数日後、お小夜は毒殺未遂の容疑者として逮捕された。お小夜は既に覚悟していた。

八ああ、昔一郎さんが私に、死にたければこの薬で死ぬと置いて行った、其時に一層、死んでしまえばよかった。一郎さんのその薬で、その人の奥さんを殺そうとは、何

の因果が恐ろしい。お藤がムゴすぎるのだ。私はあたりまえの事をやったのに過ぎないのだ。あゝ馬鹿々々しい一生だった、お藤が恨めしいV  
と恨んだ。

裁判の結果、お小夜は懲役三年と言渡されて、刑務所の鉄の門をくぐった。

夜に入って考えた。  
へどう逃げて、もがいても、捕われて鉄の鎖にしばられてしまった。この世では不法なことをやれば遂には斯うなってしまうにきままっているのだ。どこの国でも、どんな社会でもみんなそうである。女でも男でも、強い者でも、どんな慥巧な者でものがれられない。これがこの世の鉄則である。V

慰問 (一)

お小夜が刑務所へ収容されてから一月位経って、信哉は慰問した。もう秋とは言え寒い日で、風すぎに面会に行った。

お小夜は驚ろいた様な、恥ずかしい様な、悲しい様な複雑な表情で、面やつれて見えた。信哉はしんみりと語り出した。

って帰った。

一週間ばかりして、又訪問した。

信哉「おのぞみの本を持って来ました」

小夜「有り難うございます。ホントに有り難うございます  
よく見分かりました。私はとても駄目とあきらめていたのに……」

と顔を上げて、ニユツと笑った。

信哉「方々探してやっ……、粘土を布に匂み、竹ペラも

二本添えて係の方に届けておきました……。他に何か、お望みのものがありますか、考えておいて下さい。今日はこれで……」

小夜「ありがとうございます……」

お小夜は、ズツと前から楽焼を造って楽しんで居たのである。直江津で素人芸術展覧会が催された時、よく出品した。茶碗、花瓶、文鎮、人形等は、一等や二等によく当選した。町でも相当な評判であった。

数日後、また訪ねた。

信哉「食事など、お困りになりませんか」

小夜「近頃はそんなでもありません。死ぬ様なことはありませんから」

した。

信哉「お久しう御座います。お身体はどうですか」

小夜「変りはありません」

信哉「つらいでしょう」

と云うが、お小夜は下を向いて返事をしない。迷惑そうである。信哉は思った八古人が、人生は牢獄である、といったがその通りである。この世は自由の天地と言っても、決して何事も自由ではない。金力、権力、愛欲にしばられて不自由のことばかりである。真の自由は、天下いづれの所へ行ってもあり得ない。時々怒りにまかせて相手を倒そうと考えたり、愛欲に溺れて無理を通したり、人をあざむいたり、はずみではどんな無茶をもやりかねない気持になる。心の内には実に浅ましい罪を造っている。それが行動として表面に現われないだけのことである。………。V

信哉「何か、本を差入れたいのですが、御望みのものはありませんか」とポツリ／＼と静かに話しかけると、小夜「粘土細工の本が欲しいと思います……。楽焼をやりたいたのですが、此所では、金物や火をいじることが出来ませんから」と淋しそうに下を向いた。

面会の時間も来たので、信哉は「又伺いましょう」と云

信哉は、お小夜のひねくれていじけている心を聞いて淋しく感じた。

信哉「寒いでしょう」

小夜「覚悟すれば思ったより人間は丈夫なものです」

こんな問答をしながらもお小夜は八信哉はどうしてこんな所へまで自分を慰問して来るのであろうか。誰に頼まれて来たのか、と不審に思った。誰だろう……。Vと考えていた。

その年の秋、刑務所で製品即売会が催されたので信哉は行った。中にお小夜の製品らしい、粘土細工があった。一輪挿し花瓶、銀香型の文鎮、煙草の灰皿等は素人ばなれがしていた。信哉は、その三点を全部買い求めた。

数日後また訪ねた。

信哉「これは貴女の作品でしょう」

小夜「そうです。三点出したのですが、みな売れたので喜んで居りました。それじゃ、貴方が皆買って下さったのですね」

信哉「お上手ですね。お楽しみがあって結構です。身体にお気をつけて下さい」



## あとがき

彼岸も近づき、秋晴れの好季となりました。草も木もみよりの秋を迎えて居ります。店頭においしそうな木の実がならべられ、故郷の田舎の秋景色も心に去来いたしました。

それにつけても、草木に教えられつつ、いよいよみよりの心の秋を迎えましょう。渋い柿が赤く甘く、稲穂がひくく頭を下げて居りますにつけても……。

○

○近角先生の歎異抄の御講話は、「大切な証文」につき、先生の炯眼をもつて御味読下さったところで、心してお味わい下さいますよう祈念いたします。

○福島先生はかねかね源信僧都とオウガスタン、親鸞聖人とルーテルを照応せられまして、其の類似点と相違点を指適していられました。ことにキリスト教で旧教が専横と墮落の極に達しました時、ルーテルは宗教革命を唱えて、新教をひらきました。旧

教もそれによつて反省する機会が与えられました。が、キリスト教史上の大事業を成しとげたのであります。親鸞聖人はまた、山上の仏教、貴族学者の仏教を、ひろく肉食妻帯のまま、士農工商にたずさわつたまんなま成仏出来る本願念仏の大道を九十年の御生涯を貫ぬいてお教え下さつた大恩人であります。両聖の上に、黄色黄光、白色白光の妙を教えられます。

○縁谷芳隆師は西大谷の祖廟におつかえ下さりながら、竜大でも教鞭をとつていられます。最近「仏事の話」の著書も出され、仏事の種々のことを解りよくご紹介下さいました。

今はすでに亡き桑野淳城師を恩師として信のよろこびを持つて居られます。隨筆を頂きました。

○佐藤強三郎様の「堂の鈴」はあと二回で終りますが、今や浄土から破顔微笑をもつて慈悲されますことでありましょう。

○「愚禿の心」は、何時も異様に私の心を打ち続けて下さる聖語であります。深い祖聖の思召し、その片鱗を知らせて頂きましたままに誌しました。大方の御叱声をお願い申し上げます。

○

おろかなる身こそなかなかうれしけれ弥陀のちかひにありと思えば

良寛

## 御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。

※ 一道会例会

市電、新郊通り二丁目下車、東へ一丁半

○毎月廿四日午前、午後、昭和区小椋町、

※ 教西寺法話会

市電、御器所通り下車、桜花学園東側。

○九月八日午後、尾西市三条板倉。

※ 蓮光寺修道会。歎異抄講話。

一宮駅よりバス、尾西三条下車

× × ×

定 半年 二百円 (送共)  
備 一年 四百円 (送共)

編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番